

草間彌生

毎日愛について祈っている

2023年



Yayoi Kusama, Every Day / Pray for Love, [2023], © YAYOI KUSAMA, Louis Vuitton Collection 2023, Courtesy of Ota Fine Arts.

ESPACE
LOUIS
VUITTON
OSAKA

FONDATION LOUIS VUITTON
LA COLLECTION

#EspaceLV #CollectionFLV #FondationLouisVuitton

草間彌生

毎日愛について祈っている

2023年

キャンバスにアクリル、マーカーペン

Cover: 65.2 x 53.0 cm

1: 72.5 x 61.0 cm

2: 65.2 x 53.0 cm

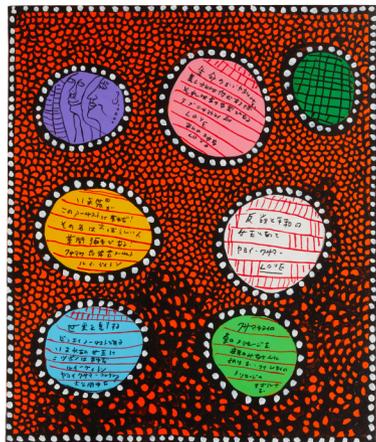
3: 80.5 x 65.0 cm

4: 72.5 x 61.0 cm

Louis Vuitton Collection

草間彌生が長期的に取り組んでいるシリーズ《毎日愛について祈っている》では、彼女が生涯を通じて追求してきた、「書くこと」と「描くこと」という2つをつなげています。最初の出版物は1978年刊行の自伝小説『マンハッタン自殺未遂常習犯』ですが、草間は幼少期より小説や詩を執筆しており、数々の賞を受賞していました。草間が自身の自伝で「私にとっては美術による表現も言葉による表現も本質的には同じです。新しい精神の領域を開拓していく方法として、どちらも存在しているのである。そして、いずれにおいても、私は常に前衛であることを目指している」と語るように、ごく最近まで区別されていたこれらの表現は、実際には同じ探求の2つの側面なのです。

アメリカ滞在中の15年間、草間は作品の構想、宣伝、制作をほぼすべて英語で行っていましたが、1973年に帰国し、改めて日本語に触れたことで、表現の新たな可能性を見出します。「日本語を使って小説や詩を書くことで、造形美術ではさぐり得なかった私の存在の別の一面に光をあてて、自己の分野を開拓し、新しい魂の位置に自分を立たせた」と語るように、言葉を用いて、草間は目に見えないものに触れようと試みています。「ずっとしたたかな、人間の生きざま、死にゆく気配、愛の存在、命の光芒と傷跡、そして宇宙の不可解なたたずまいと神秘が満ち溢れている空間。時間。距離」。この無常性の探求において、草間は詩を小さな細胞、あるいは太陽や惑星のような浮遊する形の中に閉じ込め、無限に小さいものと無限に大きいもの、ミクロとマクロの世界を同居させ、すべての生きとし生けるものに放たれることを願う平和と愛の融合を表現しています。



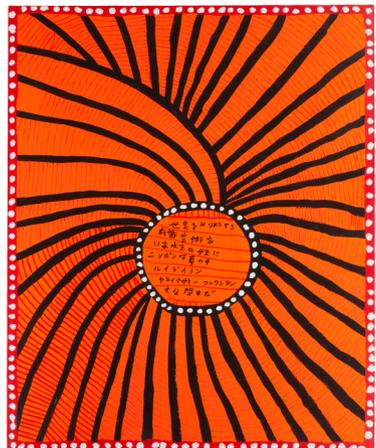
1

Yayoi Kusama, Every Day / Pray for Love, [2023].
© YAYOI KUSAMA, Louis Vuitton Collection 2023. Courtesy of Ota Fine Arts.



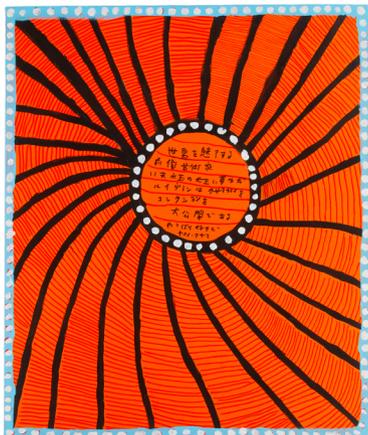
2

Yayoi Kusama, Every Day / Pray for Love, [2023].
© YAYOI KUSAMA, Louis Vuitton Collection 2023. Courtesy of Ota Fine Arts.



3

Yayoi Kusama, Every Day / Pray for Love, [2023].
© YAYOI KUSAMA, Louis Vuitton Collection 2023. Courtesy of Ota Fine Arts.



4

Yayoi Kusama, Every Day / Pray for Love, [2023].
© YAYOI KUSAMA, Louis Vuitton Collection 2023. Courtesy of Ota Fine Arts.

アーティストについて

草間彌生は1929年、長野県松本市に生まれました。現在、東京を拠点に活動しています。

子供の頃から絵を描き、文章も書いていた草間は、両方の分野で賞を受賞していました。家族の反対を押し切って美術を学び、日本画の技法を身に付けると、紙から木材、布にいたるまで、さまざまな素材を使った独自の表現を模索しはじめます。1957年、当初はフランス移住を考えていた彼女でしたが、アメリカ人アーティストジョージア・オキーフとの文通を経てアメリカ行きを決意。シアトルに降り立った後、最終的にニューヨークに定住し、アート・スチューデントズ・リーグで学んでいます。彼女がアメリカ前衛芸術界の重要人物たちと接点を持つようになるのにそれほど時間はかかりませんでした。アンディ・ウォーホルの「ファクトリー」は、クレス・オルデンバーグのスタジオと同じ建物にあった草間のスタジオのすぐ近くに位置していました。近い環境にいた2人は草間のアイデアを借用し、ウォーホルはスクリーン印刷の壁紙を、オルデンバーグはソフト・スカルプチャーというコンセプトを自らの作品に応用していました。ところが、この借用はいずれも彼女に無断で行われていました。ニューヨークの活気あるアートシーンの中心にあって、メディアからも注目を集めていたにもかかわらず、女性かつ外国人という立場にあった草間にとって、アートで生計を立てることは困難を極めました。1973年、東京の病院での手術のため帰国した草間は、その後日本に定住。激しい幻覚に悩まされた彼女は、1977年に東京の精神科病院への入院を自ら希望し、現在もそこを拠点に制作活動をしています。

絵画、彫刻、インスタレーション、文学、パフォーマンス、ファッションと幅広い分野で活動する草間は、日々実践する無意識的で瞑想的な手法から、水玉、網、花という彼女のトレードマークとなるモチーフを生み出しています。アメリカ到着直後に制作された初期の抽象的な「無限の網」は、瞬く間に記念碑的な大きさにまで成長し、やがてこのモチーフはスタジオの壁やギャラリーを侵食していきました。さらには彼女の衣服や街で拾い集めた家具、日用品にまで広がり、こうした品々を増殖する布の突起で覆ったものが「集積」シリーズです。このシリーズは、エヴァ・ヘスらがその後間もなく展開する同様の表現手法を多くの点で先取りするものでした。家父長制社会、資本主義、ベトナム戦争への抗議という大きな文脈の中、1960年代

後半の草間によるハプニングやパフォーマンスは政治的な色彩を強めていきます。日本に戻った草間は当初、家父長制的で保守的な日本社会への疑問を投げかけていましたが、やがて水玉と無限の反復という形での哲学の発展に回帰していきました。

草間は1952年、日本で初めて個展を開催しました。日本とアメリカで数多くの展覧会を重ね、1966年の第33回ヴェネツィア・ビエンナーレでは無許可で展示を行いました。1993年にはこの由緒ある国際的な舞台で日本代表として正式に招待を受け、ついに世界的な評価が確立されました。以降、彼女の作品は世界各地の多くの展覧会で取上げられており、1998年のニューヨーク近代美術館を皮切りに、1999年の東京都現代美術館、2011年-2012年のポンピドゥー・センター(パリ)およびテート・モダン(ロンドン)、2021年のグロピウス・バウ(ベルリン)、2022年のM+(香港)、2024年のビクトリア国立美術館(メルボルン)など、主要な美術館での展覧会が続いています。2017年には草間彌生美術館が東京に開館し、草間とその作品に特化した美術館として、多彩な企画展を通じて来館者が作品と出逢い深く向き合うことのできる場を創出し続けています。

フォンドシオン ルイ・ヴィトンについて

フォンドシオン ルイ・ヴィトンは現代アートとアーティスト、そしてそれらのインスピレーションの源となった重要な20世紀の作品に特化した芸術機関です。公益を担うフォンドシオンが所蔵するコレクションと主催する展覧会を通じ、幅広い多くの人々に興味を持っていただくことを目指しています。カナダ系アメリカ人の建築家フランク・ゲーリーが手掛けたこの壮大な建物は、既に21世紀を代表する建築物と捉えられており、芸術の発展に目を向けたフォンドシオンの独創的な取組みを体現しています。2014年10月の開館以来、1000万人を超える来館者をフランス、そして世界各地から迎えてきました。

フォンドシオン ルイ・ヴィトンは、本機関にて実施される企画のみならず、他の財団や美術館を含む、民間および公共の施設や機関との連携においても、国際的な取組みを積極的に展開してきました。とりわけモスクワのプーシキン美術館とサンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館(2016年の「Icons of Modern Art: The Shchukin Collection」展、2021年の「The Morozov Collection」展)やニューヨーク近代美術館(「Being Modern: MoMA in Paris」展)、ロンドンのコートールド美術研究所(「The Courtauld Collection. A Vision for Impressionism」展)などが挙げられます。また、フォンドシオンは、東京、ミュンヘン、ヴェネツィア、北京、ソウル、大阪に設けられたエスパス ルイ・ヴィトンにて開催される所蔵コレクションの展示を目的とした「Hors-les-murs(壁を越えて)」プログラムのアーティストック・ディレクションを担っています。これらのスペースで開催される展覧会は無料で公開され、関連するさまざまな文化的コミュニケーションを通じてその活動をご紹介します。